

高田裕行報告へのコメント

2024年12月15日（日）

文献班

田中禎昭（専修大学）

1. 高田報告の注目点

- ・「高度な天文知識が背景」にある天文図⇒古代中国からの移入の可能性
 - ・西暦214年6月30日（ユリウス暦）の星空との関係
 - ・そもそも星空であるのか、「確証バイアス」の可能性があるので検証が課題
- ☞ 「214年6月30日」の「五天体会合」（火星・木星・土星・スピカ [おとめ座] ・月 [月齢5.1] ）が古代中国において認識されていた事実を示す⇒どのような意味が与えられていたのか？

※高田氏が注目した日時における天文現象の古代中国の認識に焦点
⇒天文現象と石棺図の関係については保留

2. 西暦214年前後における中国の天文記録

- 高田氏が注目する日付：西暦214年6月30日
⇒後漢の献帝・建安19年5月6日
(中央研究院・中西暦轉換より)
- 『後漢書』には建安19年5月に天体会合の記事はない
⇒しかし、その1年前の『後漢書』建安18(213)年条には観察(ステラナビゲータ)結果と同様の天文現象を示す記述がある

[史料1] 『後漢書』 献帝本紀・建安18年（213年）是歳条

（建安）十八年（略）夏五月丙申（213年6月16日）、曹操が自立して魏公となり、九錫を加えられた。（略）是歳、歳星（木星）、鎮星（土星）、熒惑（火星）がともに太微垣（たいびえん）に入る

（夏五月丙申、曹操自立為魏公、加九錫、是歳、歳星、鎮星、熒惑俱入太微）

※**九錫**とは？：漢～南北朝時代、皇帝より特別に臣下に下賜された9種類の恩賞

※**太微垣**とは？

- ・ **五帝座**（距星：しし座β星【デネボラ】）
- ・ 東蕃4星（おとめ座γ・δ・ε星、かみのけ座α星）
- ・ 西蕃4星（しし座σ・ι・θ・δ星）
- ・ 南蕃2星（左執法・右執法【おとめ座η・β星】）

⇒**北辰（天帝）の前庭（朝庭） = <諸臣の空間> を意味**

- ・ 高田氏が注目した214年6月30日（建安19年5月6日）の古代中国の星空（星座）をステラナビゲータで確認

※場所：214年時の後漢の都・許（現・河南省許昌市）
（緯度 $34^{\circ}02'13.9''\text{N}$, 経度 $113^{\circ}51'54.4''\text{E}$ ）

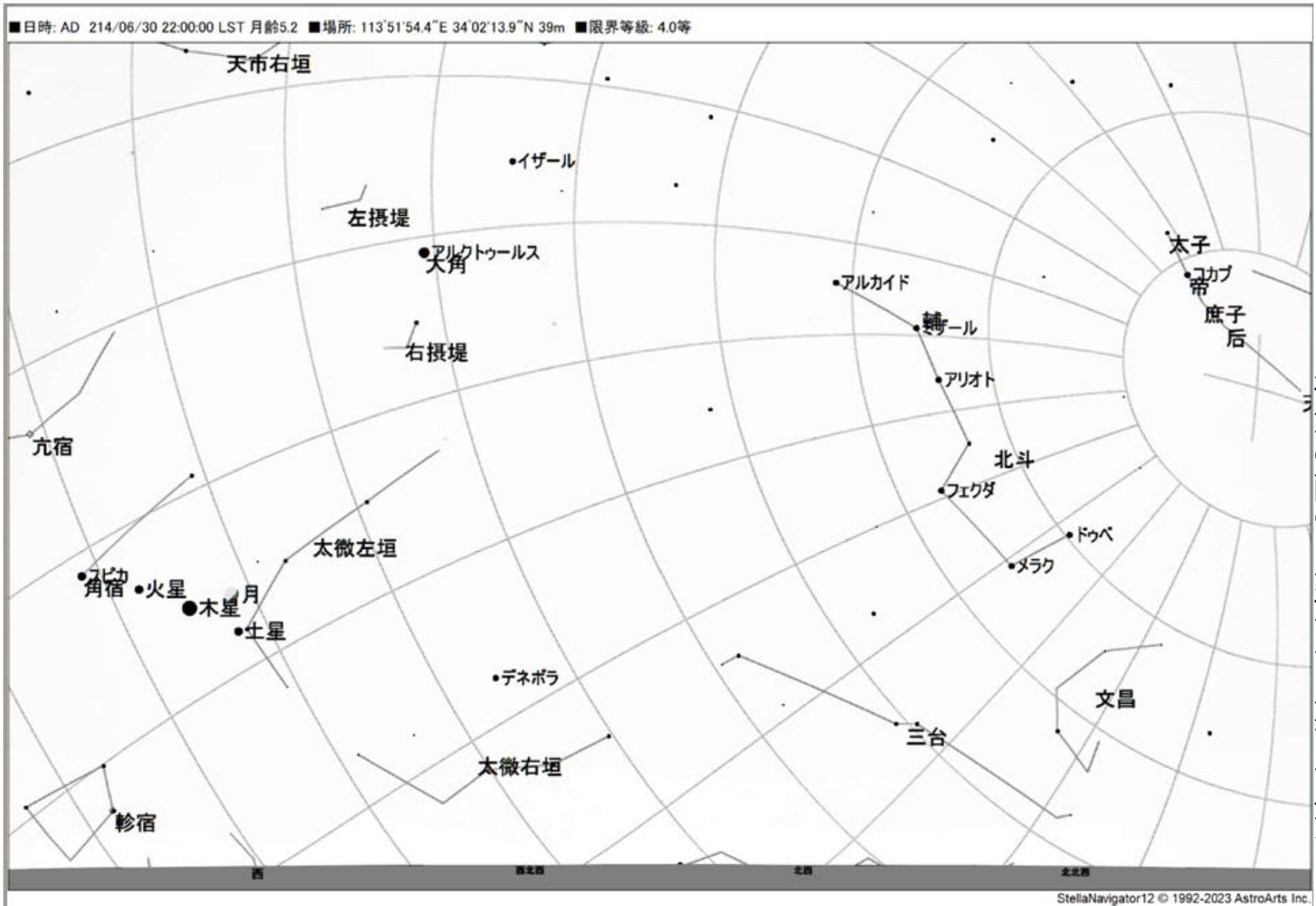
※日時：建安19年5月6日（214年6月30日） 22:00

 歳星（木星）、鎮星（土星）、熒惑（火星）が太微垣の軌道に接近・会合した状況が観察

「ステラナビゲータ12」

西暦二一四年六月三〇日午後一〇時

↓ 後漢の献帝・建安十九年五月六日



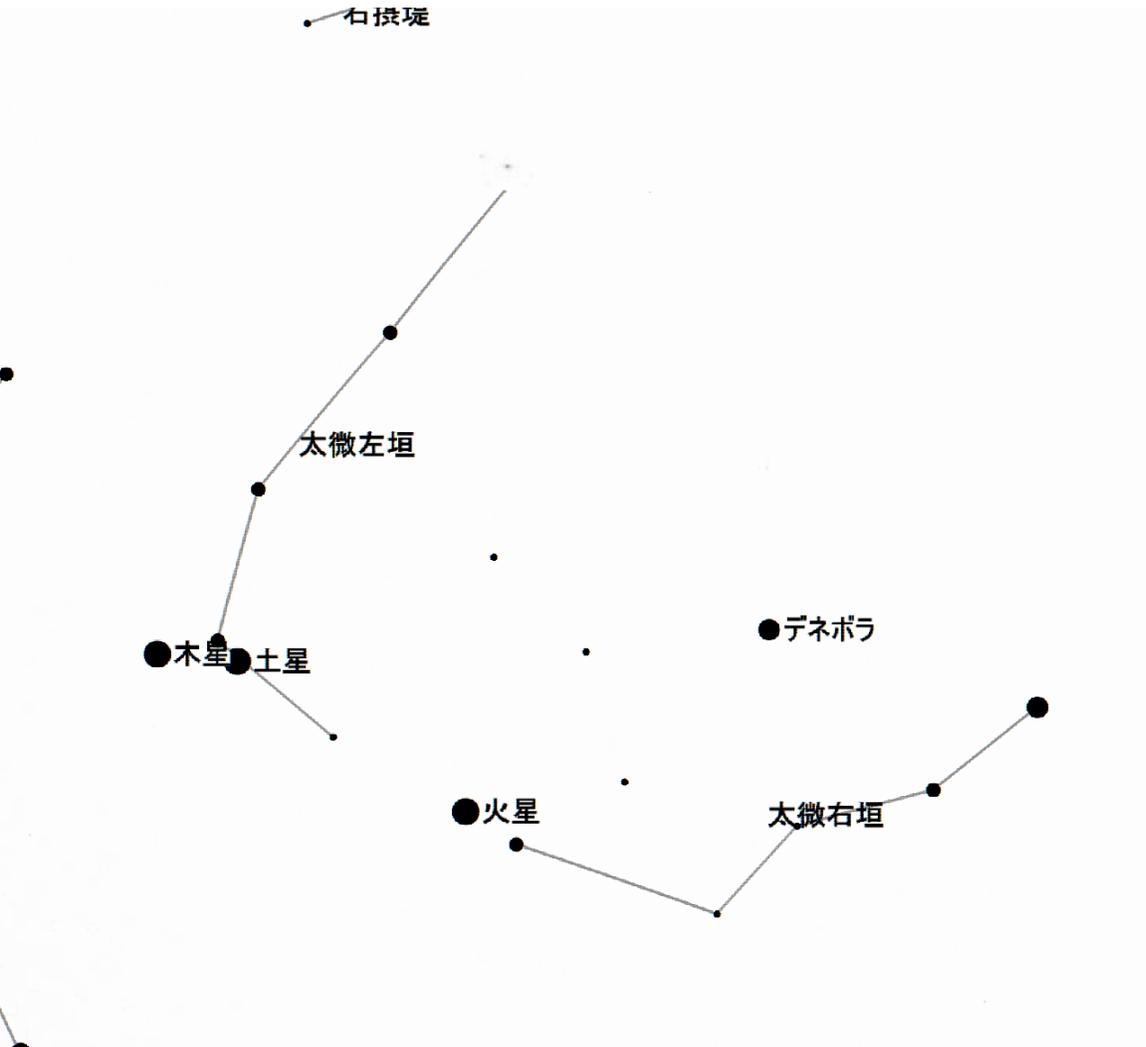
『後漢書』献帝本紀・建安十八年（二一三年）

是歲、歳星（木星）、鎮星（土星）、熒惑（火星）がともに太微垣（たいびえん）に入る

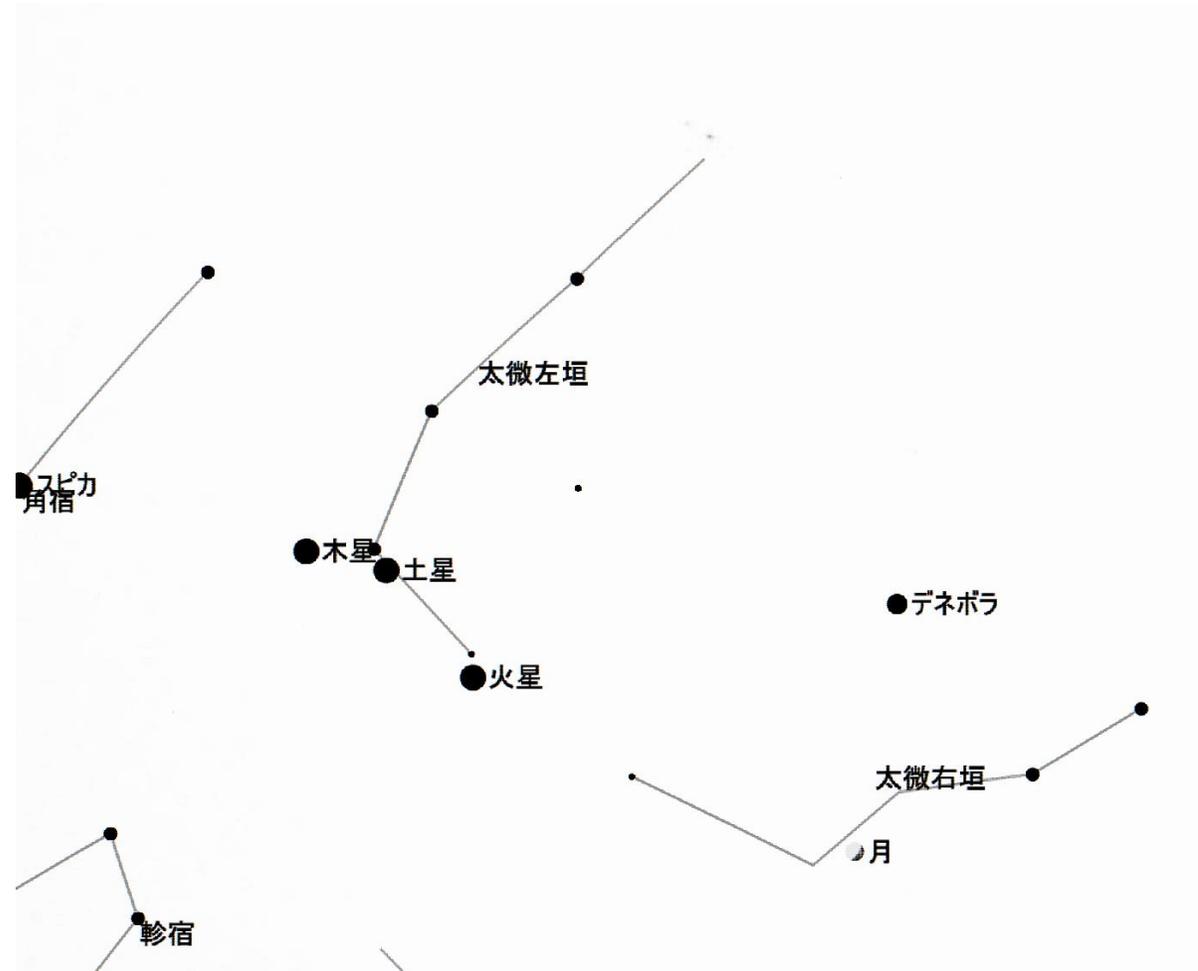
- ・ 『後漢書』 献帝本紀・建安18年（213年）是歳の天体会合は、
『後漢書』 天文志、 『宋書』 符瑞志にも登場

👉 繰り返し参照される、**政治的意味をもつ漢～魏晋南北朝時代の重要な天文現象**と位置付けられていることがわかる

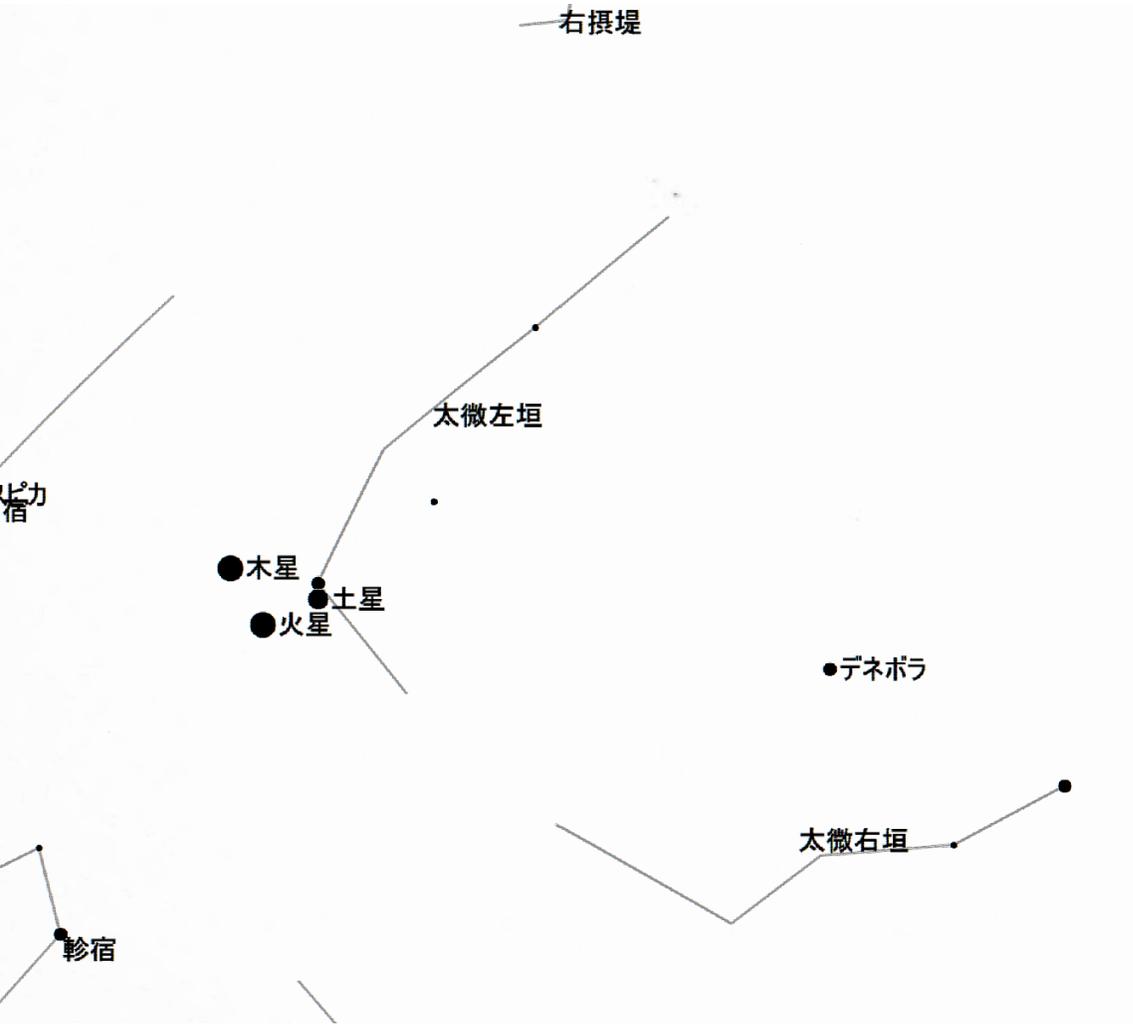
- ・ [史料2] 『後漢書』 天文志・下
(建安)十八年の秋、歳星（木星）、鎮星（土星）、熒惑（火星）がともに太微垣に入る。**逆行して留まり「帝坐」を守ること百余日に及んだ。**占に言う、「歳星（木星）が太微垣に入れば人主（君主）が改まる」
- ・ [史料3] 『宋書』 符瑞志・上
建安十八年の秋、歳星（木星）、鎮星（土星）、熒惑（火星）がともに太微垣に入る。**逆行して留まり「帝坐」を守ること百有余日に及んだ。**歳星（木星）が太微垣に入れば人主（君主）の姓が改まる。鎮星（土星）が太微垣に入れば国内に兵乱があり、人主（君主）がそれによって衰弱する。この三つの天文現象は、漢の皇帝が姓を改め（王朝）交代を表す怪異である



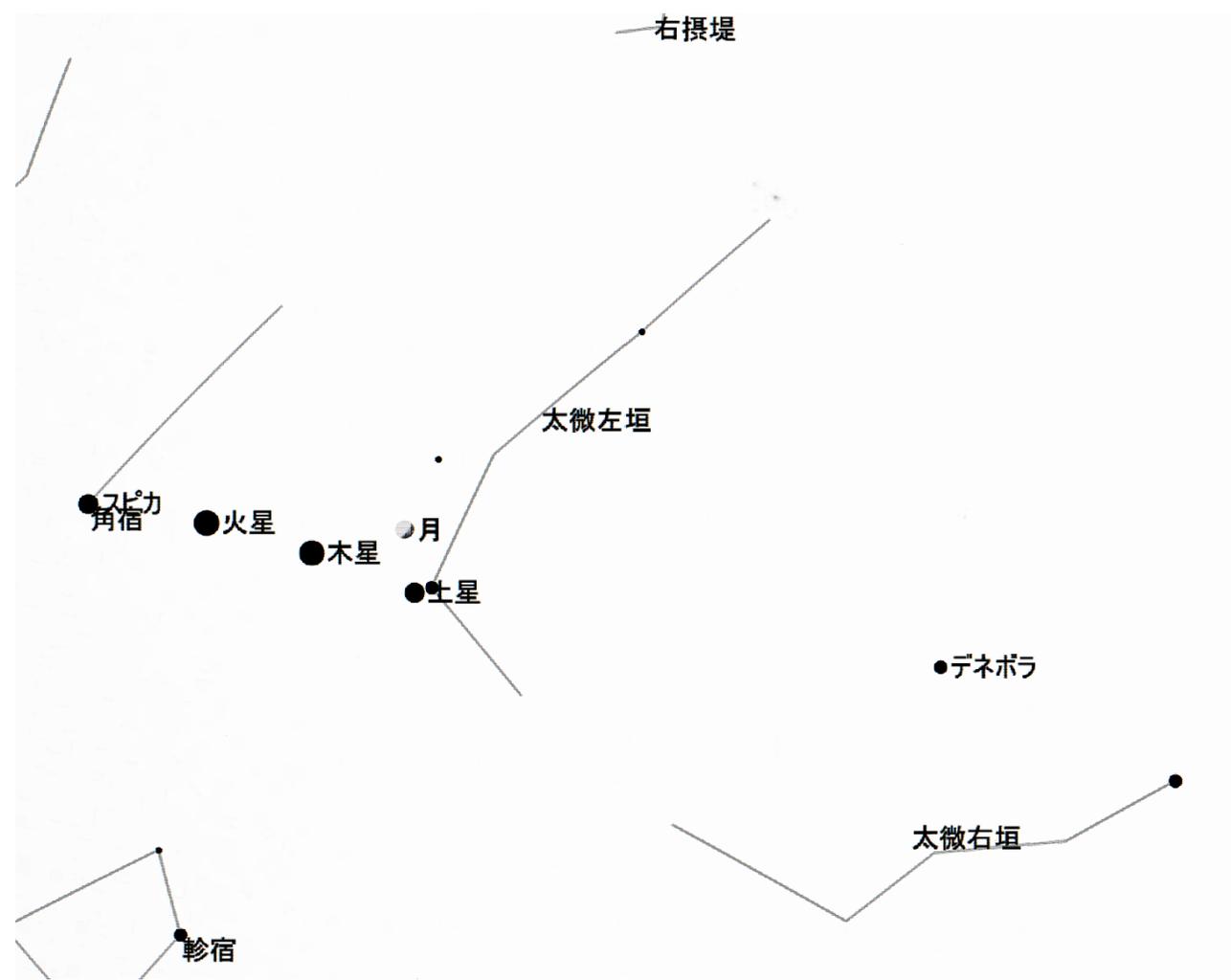
214年5月20日 22:00



214年6月1日 22:00



214年6月15日 22:00



214年6月30日 22:00 (高田氏の夜空)

・ **【史料3】『宋書』符瑞志・上**

建安十八年の秋、歳星（木星）、鎮星（土星）、熒惑（火星）がともに太微垣に入る。逆行して留まり「帝坐」を守ること百有余日に及んだ。歳星（木星）が太微垣に入れば人主（君主）の姓が改まる。鎮星（土星）が太微垣に入れば国内に兵乱があり、人主（君主）がそれによって衰弱する。この三つの天文現象は、漢の皇帝が姓を改め（王朝）交代を表す怪異である

・ **【史料1】『後漢書』献帝本紀・建安18年（213年）是歳条**

（建安）十八年（略）夏五月丙申（213年6月16日）、曹操が自立して魏公となり、九錫を加えられた。（略）是歳、歳星（木星）、鎮星（土星）、熒惑（火星）がともに太微垣（たいびえん）に入る

※九錫：漢～前漢の王権を篡奪した新の王莽に下賜された「九命の錫」が原型。
九錫の臣下への賜与は禅譲（平和的な王朝交代）の前段階と認識

 建安18年の天体会合現象は、後漢から魏への王朝交代（易姓革命）を天が示したもの

◎後漢・建安年間の天体会合解釈のソースは何か？
⇒新・後漢交代期の名士・**郅惲**の故事が注目

※**郅惲（しつうん）**：『後漢書』列伝・郅惲伝に登場する、**天文分野説**や**暦法**に通じた名士。前漢王朝から王権を篡奪した新の王莽の時代、漢の復興を**天文現象の観察から漢（後漢）の復興を予言**。怒った王莽に獄に繋がれた

【史料4】『後漢書』列伝・郅憚（しつうん）伝

郅憚（字は君章）は汝南郡西平の人である。（略）成長すると『韓詩』や『嚴氏春秋』を研究し、天文や暦法に精通した。王莽の時代には賊が各地で蜂起していたが、郅憚は天象を観察し占い、友人に嘆じてこう語った。「今、鎮星（土星）、歳星（木星）、熒惑（火星）は並んで天の川にあったが、翼宿（コップ座・うみへび座付近）・軫宿（からす座付近）の領域に分かれて去っては戻る現象を繰り返している。このことから、漢王朝は再び天命を受けるであろう。そしてその福は徳を持つ者に帰する。もし天に従い策を打つ者がいれば、かならず大業を成し遂げるだろう」

- 👉 建安年間の後漢から魏への王朝交代の予兆としての天文現象は、郅憚が観察した新から後漢への王朝交代の予兆としての天文現象と同一のものとみなされた可能性

3. なぜ建安19年（ステラナビゲータ）ではなく、 建安18年（『後漢書』）なのか？

- 五帝座（デネボラ）を守る位置にある火星・木星・土星の会合、火星の逆行、太微垣との接近という現象は、建安18年にはなく建安19年にみられるもの
 - 『後漢書』は建安18年の「是歳」として月日を明示しておらず、建安18年5月の魏の曹操の自立（魏公に封ぜられる）記事に易姓革命を意味する天文記事がかけられている
- ⇒ 『後漢書』編纂段階（宋の時代）に、郅惲によって観察された新から後漢（史料4）への王朝交代の天文予兆の説を踏まえ、後漢から魏（史料1～3）への王朝交代の予兆現象として1年ずらし記載し、曹操自立の記事に組み込んだのではないか？

まとめ

- ・ 高田氏が注目した「214年6月30日」における「天体会合」は、古代中国、とくに漢から魏晋南北朝時代にかけて王朝交代（易姓革命）の予兆としての天体現象を表している
- ・ 3世紀前半の魏王朝の成立（曹魏の自立）を予兆する特異な天文現象として古代中国において認識されていた可能性が高い
- ・ **天文分野（天を二十八宿【中国星座】に区分する）説に精通した郅惲の学説**が起源
⇒後漢から魏への王朝交代＝魏公・曹操の自立を天が祝福して示した偉大な天文現象として記録・伝承

追記

ヒャーガンサン古墳は、鳥栖市と基山町の境界近くにある八ツ並金丸遺跡（やつなみかなまるいせき）の標高56mの丘陵に所在していた古墳で、古墳時代後期（約1,450年前）に築造されたものです。平成10年～11年にかけて発掘調査を実施した結果、墳丘は円墳で直径20m、高さ2m、石室は複室両袖型の横穴式石室を持つ古墳であることがわかりました。全長は4.8m、玄室の長さは3.1m、幅は最大2.2m、高さは最大2.2mの規模です。

この古墳には赤色の装飾文様が石室の奥壁に描かれています。（鳥栖市ホームページより）





・ 難波宮跡出土重圈文軒平瓦・瓦当部にみえる「十字陽文」

[櫻井久之説] 北極星を意味する

(同「重圈文瓦の意匠について」(『水野正好先生古古希記念
論文集文化財学論集 第一分冊』,2003年)

[内田和伸説] 十字文は軒平瓦の中心を外していることから、黄道の中心の象
徴であるが、黄道の極には星がなかったために珠点では表さ
れなかったと理解(同「大極殿院の設計思想と出土遺物の解
釈」『ランドスケープ研究』68-5, 2005年)